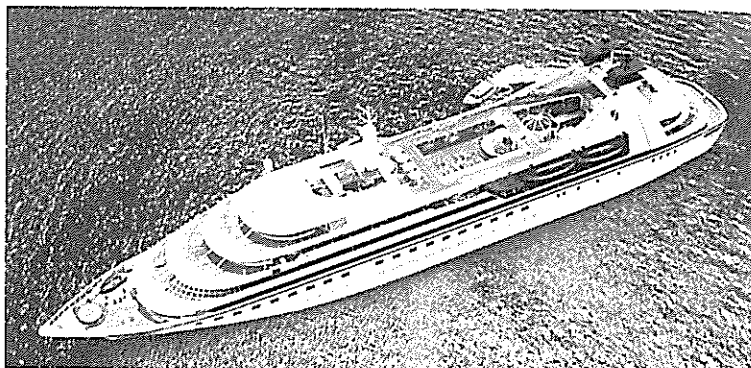


シーボーン・クルーズ・ライン

山田 通生

(日本海事史学会理事)

上空から見たシーボーン・スピリット
Seabourn Spirit。同型3隻中の2番船で、
1989年の竣工。(SEABOURN CRUISE LINE)



WORLD'S CRUISE OPERATORS ⑧ — SEABOURN CRUISE LINE

by Michio Yamada

シーボーン・クルーズ・ラインは、ハイグレード客船を運航するクルーズ・オペレーターである。

1987年にサンフランシスコで誕生。1万トン級のヨット・クルーザー型客船2隻を新造し、北米中心のラグジュアリー・マーケットに参入した。その後、船隊を増強し、91年に業界最大手のカーニバルの傘下に入った。

98年にはカーニバルに加わったキュナードと合併。シーボーン・ブランドを生かしながら、マイアミに本拠を置くキュナードと統合的に運営されている。

北米のラグジュアリー・マーケットに参入

シーボーンの創業者は、ノルウェーの資産家アトル・ブリネスタッド (Atle Brynestad) である。最初はシグネット・クルーズ・ライン (Signet Cruise Line) と称したが、社名のコピーライト問題が生じたため、まもなくシーボーン・クルーズ・ラインに改められた。

ブリネスタッドは、新会社の社長にウォーレン・タイタス (Warren Titus) を充て、経営をゆだねた。タイタスはAPL (American President Lines) の出身で、1970年のロイヤル・ヴァイキング・ライン (RVL: Royal Viking Line) の発足以来、同社の指揮をとってきた北米クルーズ業界のベテランである。

ブリネスタッドとタイタスは、シーボーンのポリシーとして、RVLと同じラグジュアリー路線を選んだ。ただし、船の規模はRVLが3万トン型、700人乗りの中型船を主体としたのに対し、新会社は1万トン型、200

人乗りの小型船を運航することにした。ヨット・クルーザーと呼ばれる船で、ラグジュアリー・マーケットにこのタイプが欠けていると見たのだ。

かくしてシーボーンは、客船2隻をドイツの造船所に発注した。88～89年に竣工したシーボーン・プライド Seabourn Prideとシーボーン・スピリット Seabourn Spiritがこれである。船価は各5,000万ドルだった。

契約には3番船のオプションが付いていたが、シーボーンはこれを行わず、クロスター・クルーズが権利を入手してロイヤル・ヴァイキング・クイーン Royal Viking Queenとして建造し、傘下のRVLに運航させた。のちに同船はシーボーン船隊に加わってシーボーン・レジェンド Seabourn Legendと改名しており、最終的に3姉妹が顔を揃えたのである。

ヴァルチーラが開発したヨット・クルーザー

ヨット・クルーザーとは一体どんな船であろうか。

このタイプを開発したのは、カイ・レヴァンダー (Kai Levander) が率いるヴァルチーラ造船所 (フィンランド) のデザイン・チームである。客船の大型化が進むなか、船客定員が50～200人の小型クルーズ船がマーケットに少ないこと、これが着想の動機だった。

ヴァルチーラ・デザインによるヨット・クルーザーの先駆けは、1980年代にノルウェー船主から受注したシー・ゴッデス Sea Goddess級である。のちにシーボーン船隊に加わる小型クルーズ船で、現代のヨット・クルー

シーボーン・クルーズ・ライン客船一覧

注) 1 船客定員はlower beds (下段ベッド) の基準数。2. 推進機関のDはディーゼル。

船名	竣工年	総トン数	船客定員	推進機関	建造所	備考
Seabourn Pride	1988	9,975	212	D	Schichau Seebeck	
Seabourn Spirit	1989	9,975	212	D	Schichau Seebeck	S. Prideと同型
Seabourn Legend	1992	9,961	212	D	Schichau Seebeck	S. Prideと同型。元Royal Viking Queen/Queen Odyssey。96年購入
Seabourn Goddess I	1984	4,253	116	D	Wärtsilä	元Sea Goddess I。99年Cunardから移籍。01年売却
Seabourn Goddess II	1985	4,260	116	D	Wärtsilä	元Sea Goddess II。99年Cunardから移籍。01年売却
Seabourn Sun	1988	37,845	740	D	Wärtsilä	元R.V.Sun。99年Cunardから移籍。02年HALへ移籍。現Prinsendam

ザーは、同船のデザインから出発している。かつて昭和海運が運航した“おせあにつぐれいす” (5,218 総トン, 89 年竣工) もそうだ。

その特徴は、大型ヨットに似た船体ラインを持っていること、パーティカル型の公室配置を採用したことなどである。パーティカル型というのは、公室の大部分を各甲板の後部に垂直方向に設ける方式である。

これだと、振動や騒音が少ない前方に客室を配置できるメリットがある。一方、船客からみれば、階段やエレベーターを使って公室間を垂直方向に移動するのは苦痛であり、小型クルーズ船だけに許される配置といえる。

ちなみに、ヨット・クルーザーは昔からあった。20 世紀の初め、独ハバクのバリンが創始したクルーゼン・ヨットがこれに該当する。新造船としては、1901 年に就航したプリンツェシン・ヴィクトリア・ルイーゼ Prinzessin Victoria Luise (4,409 総トン) が最初である。伊豆のスカンジナビア (元ステラ・ポラリス Stella Polaris, 5,056 総トン, 27 年竣工) も同じタイプだ。

全室がスイートのシーボーン 3 姉妹

シーボーン 3 姉妹では、R.V. クイーン時代に現 3 番船のレジェンドが竣工の翌年に早くも来日した。1996 年 5 月には 1 番船ブライド、99 年 3 月には 2 番船スピリット (那覇のみ) が初来航し、それ以後も訪日している。

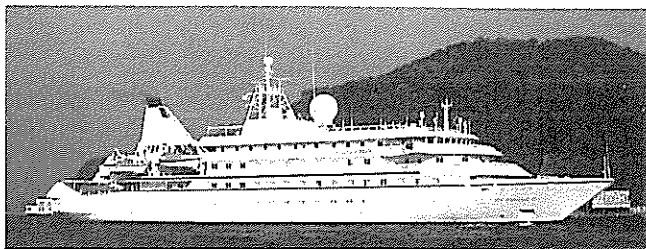
97 年制作のアメリカ映画「スピード 2」では、シー・ジャックされる客船役にレジェンドがチャーターされ、豪華な公室や客室をはじめ、操舵室、乗組員居住区などが銀幕に写し出された。外国のヨット・クルーザーのなかでは、日本で最もよく知られている船である。

客室数は 106。最大の特長は、全キャビンが海側のスイートであることだ。広さは 54~26 平方メートル。バス・シャワー付き浴室と広いウオーク・イン・クローゼットがあり、ワールドワイドなロング・クルーズへの投入を想定した客室仕様となっている。調度品にはオークを素材にドイツ職人が手作りで仕上げたものを備えた。

公室配置は前述のようにパーティカル型。船体中央のレストランと最上部の展望ラウンジを除いて、後部に設けられている。船尾にはマリン・スポーツ用のプラットフォームもある。

外形と内装のデザイナーはノルウェーのユラン (Peter Yran) とストルブラーテン (Bjorn Storbraaten)。曲線を多用し、明るい色調を好むデザイナーで、これまで多くのラグジュアリー客船を手がけてきた。

船籍はノルウェー。乗組員は、士官がノルウェー人、クルーはインターナショナルとなっている。



ヨット・クルーザー型客船の走りとなったシー・ゴッデス姉妹の一隻シー・ゴッデス II Sea Goddess II。一時シーボーンに所属していた。(小林 義秀)

船内サービスでは、フリードリンク、ノーチップのオール・インクルーシブを実行している。ラグジュアリー客船の多くが採用しているこのシステムは、もともとプライベート・ヨットクラブの慣行から来たもので、戦後ではシー・ゴッデス級が最初に導入したようだ。

カーニバル傘下のラグジュアリー・クルーズ

カーニバルの資本参加について、ブリネスタッドとカーニバル会長のアリソン (Mickey Arison) との間で合意が成立したのは 1991 年 11 月である。カーニバルはこの時シーボーン株式の 25 パーセントを買収し、96 年にはこれを 50 パーセントにふやした。ヨット好きのラリー・ピメンテル (Larry Pimentel) が社長として送り込まれた。

98 年にはキュナードがカーニバルの傘下に入り、シーボーンと合体し、二つのブランドを生かしつつ、一体的に運営されることになった。ラグジュアリー・マーケットでは、世界最大のクルーズ・オペレーターの誕生である。

シーボーンの本拠は、サンフランシスコからマイアミに移転し、ピメンテルが新会社の社長になった。現在は、女性社長のパメラ・コノヴァー (Pamela Conover) が両ブランドの経営に当たっている。

合体の際の船隊調整で、キュナードからロイヤル・ヴァイキング・サン Royal Viking Sun とシー・ゴッデス級が加わり、シーボーン・サン Seabourn Sun、シーボーン・ゴッデス I / II Seabourn Goddess I / II となった。

だが、これら 3 隻がシーボーンで稼働したのはわずか 2~3 年。シーボーン・サンは HAL (Holland America Line) へ移籍し、シーボーン・ゴッデス姉妹はブリネスタッドに買い取られた。ブリネスタッドは、ピメンテルと共同でシードリーム・ヨット・クラブ (SeaDream Yacht Club) を立ち上げ、2 隻を使ったヨット・クルーズを始めた。

結局、シーボーン 3 姉妹だけになった。カーニバルの総帥アリソンは、「シーボーンはクルーズのロールス・ロイスである」と称賛している。シーボーン 3 姉妹は、オーナーの言葉を保証する究極のラグジュアリー客船として残されたのである。